

P-34.

救急医療センターにおける中毒症例の検討

(救急医療センター)

- 鈴木 秀道、小池 荘介、牧野 義文
- 池田 裕介、池田 譲治、藤川 正
- 金井 尚之、佐々木博一、九里 武晃

1993年6月の当院救急医療センター開設以来31ヶ月間に扱った中毒症例について検討を加えたので報告する。

この期間に対象となった中毒症例は171例でこれは同期間の当センター全受診患者数2223例の7.7%を占めていた。

中毒の原因物質としては医薬品70例、有毒ガス2例、家庭用洗剤2例、有機溶剤2例、殺虫剤1例、除草剤3例、化学物質4例、タバコ1例、ふぐ1例、覚醒剤1例であった。サリン事件の被災者79例を除けば自殺企図によるもの88例、事故によるもの4例自殺企図が大半であった。外来診療のみの患者は87例で、残りの84例が入院加療となった。入院患者における治療内容は大量輸液、利尿による排泄、イレウス管を用いた腸管のクリーニングを原則とし、更に、意識障害遷延例、血中蛋白質と結合する薬物服用例など22例に対し血液吸着法を施行した。平均入院日数は7.6日で、53例は軽快退院、28例は精神疾患治療のため精神科転科、もしくは転院となった。サリン中毒の1例と低酸素脳症に陥った1例は意識清明とならず転院した。死亡は重クロム酸カリウム中毒の1例のみであった。

結語：①中毒症例での治療に関して、従来は胃洗浄をはじめとする中毒物質の吸収の阻止と、強制利尿、活性炭による原因物質の除去療法が行われてきた。これらに加え近年は血液浄化法の進歩により、血液吸着が安全に行えるようになり、有力な治療手段となっている。②人的災害を除いた大半の症例は自殺企図であり、精神的なfollow upを含めたcareが重要である。

P-35.

東京医科大学本院における紹介・逆紹介患者の地域分布について

- (病院管理学教室) ○村越 昭男、益子 研士
- 渡邊 好文、大原 達美
- 中村 捷夫、北村 昌之
- 安斎 育朗、名和 肇
- (板橋中央病院) 中村 哲夫

【目的】本院は、平成5年12月に特定機能病院として承認を受けた。特定機能病院の役割の1つとして医療連携があり、本院においてもより一層の地域の医療機関との連携が必要となった。今回、我々は、紹介・逆紹介患者の地域分布を知るために調査を行ったので報告をする。

【方法】平成7年4月より稼働を始めたホストコンピュータによる病診連携システムのデータを利用し、平成7年4月から平成8年3月までの1年間における紹介・逆紹介患者について分析を行った。なお、期間内の紹介患者は15,868人、逆紹介患者は8,052人であった。このうち、医療機関名住所などが登録されたものに関して分析を行った。

【結果】東京都内からの紹介患者数は、総数の87パーセントを占め、逆紹介患者に関しても90パーセントを占めていた。更に、東京都内の内訳としては、新宿区・杉並区・中野区・世田谷区・渋谷区の地域が大半を占めていた。紹介に関しては、医療機関数と患者数が比例しているが、逆紹介に関しては医療機関数と患者数が必ずしも比例していない。これは、逆紹介に関して特定の医療機関に患者が集中しているためと思われる。また、紹介患者数ほど逆紹介患者数は多くなかった。

| | 紹介 | | 逆紹介 | |
|------|-------|-------|-------|-------|
| | 医療機関数 | 患者数 | 医療機関数 | 患者数 |
| 新宿区 | 244 | 2,052 | 96 | 432 |
| 杉並区 | 221 | 1,521 | 68 | 376 |
| 中野区 | 170 | 1,261 | 66 | 278 |
| 世田谷区 | 142 | 908 | 50 | 601 |
| 渋谷区 | 119 | 821 | 45 | 343 |
| その他 | 751 | 3,250 | 227 | 791 |
| 合計 | 1,647 | 9,813 | 552 | 2,821 |